

十月作品

月集スバル



☆今月の四人☆ (小島ゆかり選)

現世の音

水 島 晴 子 兵 庫

からうじて食事終へたるわれの手に甘納豆の三粒載せ呉る
補聴器を青くともして耳にせり現世の音がすこし聞こえ来
思はずも痛みにこゑを上ぐるとき時間空間ぐらり歪めり
土のうへゆく芋虫さながらにもくりもくりと動きなづむも
うたひつつ学寮の廊あゆみし若く名を挙げ早く逝きけり

蟬しぐれ

桑 原 正 紀 東 京

賞味期限三日すぎたる牛肉の味変^{あぢん}賞味すウエルダンにして
月齢の暦に五日目の月が地味にかがやくわが誕生日

この年も地味に生きよと五日目の月が諭せりわが誕生日
夜の更けにふと聴きとめし蟬しぐれテレビのゴルフ中継のなか
地上の生すなはち末期の蟬のこゑ密、密、密、密ひしめきて濃し

自力で生きて

木 畑 紀 子 京 都

夜の雷雨いづこにしのぎぬしならむ朝のあをぞらは鳥の領分
ほがらかにうぐひす鳴けば托卵の機をねらふこゑ杜鵑^{とび}するどし
蝶、とんぼ交尾にむちゆう驚、たげり餌食^えみにせはし野生の時間
その嘴^{くちばし}にくねる蚯蚓をくはへをり鴉はけふも自力で生きて
どくだみの白き星消えつゆくさの青き星出づこ草宇宙

花束とどく

島 田 暉 神奈川

迷ふなく今年も夏はめぐりきて萎えゆく吾に夕立恵む
願ひごと天に祈れば星空の深き穴より花束とどく
いつのまに羽根の生えたる吾なるや小鳥と共に歌唄ひ出す
怒ること多きこの世に生きつぎて愚の字鈍の字何か愛しき
石段を転げ落ちたる木下闇黄の山吹は老いを慰む

☆

☆



杜 沢 光一郎 埼玉

転がつて腸骨折つてリハビリのあれこれに耐へつつはや四箇月
病院食の事のほかなる不味さにも馴れてきたころ退院となる
退院にも嬉しさなどなしコロナウイルス浮遊せる外に放り出さるる
整形外科のま四角なビル、コロナウイルスのシェルターとも見ゆ外から見れば
杖つきて真夏日の道路あゆみゆく短きおのが影を踏みつつ

武 田 弘 之 神奈川

文学部地下一隅に夜学生生われらは熱く歌を語りき
侵入を拒み校庭に対峙せり互みに若き警官たちと
若きより働きながら学び得るよろこびありて歌を詠みにき
「百一歳までの錠剤をのむ」と詠ふ君を待みて在り経しものを
名も高き水野昌雄氏逝きたれどわが内に横井源次郎生く

高 野 公 彦 千葉

藻の陰に遊ぶ目高の子を見れば天上天下すべて尊し
この目高わが家に在りて四十年子が子を生みて生き継ぐ目高
歌詠みの蓮月のこゑ聞くごとく色彩事典の〈生成〉見てをり
樟大樹ゆつたり揺るるさま見れば風と重力遊ぶに似たり
往生はあの世に往きて生きることにされど今宵の締め鯖うまし

仲 宗 角 三 重

わが知れる北村たまよは死の前にひとこと言ひき、かんにんな仲さん
たまよさんはタバコ吸はぬと言ふけれど足元見れば吸ひがら一つ
かのときにけもののごとく襲ひこし大工をいつかさがつてゐたり
車もて我を轢き殺さうとした男フィリピンに行き、亡くなりしとぞ
けもの仔同じけものになるものか全財産を取り上げられぬ

奥 村 晃 作 * 東京

ワクチン接種二度終えし我、一度の人、「予約出来た」と先ずはその話題
コロナ禍の世なればマスクし手洗いも励行すワクチン二度打ちしわれ
ワクチンを二度打ちしわれら自粛解き墓参せんとす電車に乗つて
雨の日の駅前タクシー来ざるゆえ一万歩歩き墓参すわれら
二〇〇〇円の仏花を妻は捧げたり両親きょうだい眠れる墓に

森 重 香代子 山口

杉檜造林、間伐、伐採かの頃の単身の日々夢のごとしも
登りつめ尾根に望みし海のいろ忘れじ半世紀まへなる記憶
伐採の時期迎へぬむ山林ををりをり思ふ家出でし身は
むなしかる。櫛としも思はれて湯に入るまへの鏡に向かふ
文旦の大き虚ろをたづさへて湯に浸かりをりまがなしき夜や

日 影 康 子 富山

介護しつつ眠る夏夜は明け易しわたしにも少しの眠りを下さい
カナディアン・ロッキーの基地パンフにて二泊せし白夜を夏来れば思ふ
何時までも暮れぬ白夜の窓に見きカスケード山の樹のなき山肌
うかららと蛭狩りせし遠き日や生家の寺域を流るる川の辺
不祥事に大関朝乃山の出ずなりし大相撲さみしましてわが富山



宮里 信輝 神奈川県

水力、火力、風力、原子力、太陽光から作られる偉大な電気
家電、クルマ、電車などなき江戸時代目には見えない電気無ければ
なづきへと自前なる歯は伝へるもシャキシャキ、ぶるん、コリコリ、ねつとり
大谷の大本壘打伝へるも逆転で負け「エンゼルス」嗚呼
手と足の触手をつかひ抱擁すところきあへるふたつ心臓

古屋 祥子 群馬

贈られし歌集いそいそ手にすれど片や薄れ目、片方は見えず
しつかりと文字は読みたし持ち重る一冊を丸ごと両手にさする
眼の奥が痛めば本を手放せりまだまだ読みたい、知りたい本を
見たきもの見えぬわが身にも考へる自由残されてゐる
あと幾年「生」は可能か不自由を託ち自由をたもつは氣力

影山 一男 千葉

十月の空の青さの記憶あり敗戦の夏の青さは知らず
オリンピック道路拓くと青山の墓は強制移転されにき
反抗期に入りしばかりの中学生五輪観戦ひとり拒みぬ
中一に生れし反抗精神を灯しつづけて五十年過ぐ
オリンピックの思ひ出語る菅総理東京人の悲哀は知らず

狩野 一男 東京

此やこの鹿兒島いちき串木野は勘場蒲鉾店の「つけあげ」
酒に酔ひ富山干柿ミルフィーユ食ひて静けし七夕のよる
弁解をしたくはないがワクチンの接種まだなり締切過ぎて
コロナ下のオリンピックのただなかの恋愛達の幸をし祈る
へありがとうございましたへありがとうございましたと応じおしまひ

岡崎 康行 新潟

先生はいづこへ行ってしまはれし探せぬやうにできてゐるらし
玄関の靴入れのうへに置かれたるあぢさゐの花蓋のつぶつぶが散る
休みつつも激しく夜を鳴き出だすいのち終はらんとするあぶらぜみ
歩みゐるてふいに気づきぬ右足がかつてに右へ行きたがつてる
場面としては閉め忘れたる空間が風に開いたりしてゐる感じ

小島 ゆかり 東京

ワクチン接種終はりてあふぐ梅雨のそら 東京は深海のやうだな
ひとり来て以前暮らした町をゆくわれは過去からの訪問者
バスでゆく町はつゆ晴れ街路樹の人面に似る瘤も見て過ぐ
停車中のバスより見ては思ふこと幹かゆきとき木はつらからん
近づくとき遠ざかるときこの町のどのバス停にも母が佇つなり

大松 達知* 東京

二十年ひとりのひとにちよこちよこ切つてもらつて白くなりたり
酸っぱいと否定されたるデコポンをこはすくなく夫は食べる
ちちいろの入浴剤をはらはらと振り入れて五十の体は見えない
中途半端な吃音と中途半端なアトピーのわれの半生
いまはもう水でないかもしれない、ぼくを濡らしたうづべの雨は

田宮朋子 新潟

石の下にゐるのは草鞋虫わらぢむしにして草履虫ざうりむしとは縁戚ならず
見るからに若からぬ蛇ぬぬ、ぬぬと這ひて垣根の隙に消えたり
名を知らぬ木として村の藪の中いづも見てゐし木は玄圃梨けんほなし
わが前を走る富士山ナンバーについて行きたし真夏の富士へ
垢すこし落とせば言葉ひかるなり「娑婆」は音訳「忍土」は意訳

津金規雄 神奈川

旧知の友権間板ヘルニア訪ね来て梅雨のよるひる密に語らふ
すべき事な一人も出来ない身は臥してどーでもいーさの境地に至る
ワクチンの接種も延期す何もかもが我を離れてゆくむべしこそ
持ち出した椅子に動けず廊下から外を見てゐる老コツペリア
力ある麝香揚羽のはばたきを贅とし視をり真夏日の庭

小山富紀子 京都

鈴の音のごとくころころこぼれ落つ若葉青葉をもれ来しひかり
コロナ禍の外界見下し星たちはベチャクチャおしやべりマスクもせず
冷蔵庫の棚を外して鎮座さす君が好意の大栄西瓜
鉾を建て鉾動かさず鉾を解く令和三年巡行日和
同姓の英霊の墓並びをり二基は兄弟一基は従兄弟



清水正子 神奈川

コロナ禍に足ふらつけど「巨き荷物」オリンピックを背負ふ日本
聖火リレー今日はいづこそテレビにはトーチキッスが赤くゆらげり
「駅ピアノ」「空港ピアノ」見て聞いてコロナ鬱を遣る昨日また今日
コロナ禍で進展なきか彼のこともつと聞いてよと女孫いひしが
二回目のワクチン接種うけし身に免疫つくや頭痛のするは

小嶋一郎 佐賀

誤りて言ふこともなしディスタンス、フェイスシールド斯く口馴れて
藤棚に昇り剪定するわれを妻は見に来る一〇分置きに
月曜を眼まぶた、労働の日を決めてテレビ無用と妻にも強ひる
百日紅盛る向かうに二歩下がり一日花の酔芙蓉咲く
仰向きに水飲む男孫恐しきまで失りたるその喉ほとけ

後藤美子 北海道

汗ぬぐひ茗荷を刻む六月尽コロナ禍やまず籠り居つづく
葬儀礼拝に侍しつつかもふとほき日にわれら結婚の証人したまひき
いかめしき病名つきぬ（変形性膝関節症）歩むに苦し
快方に向かふをひたねがひ週ごとに通ふヒアルロン酸注射
消炎剤こよひも貼りて床に入るかすか匂へり身じろぐ度に

福士りか 青森

なんとといふ忍耐強さ猛暑日の校長講話聞く生徒らは
体育館三十七度の終業式マスクは徐々にホツカイロめく
生徒らの胸の動きを測りつつ倒れる前にマスク外さず
「ねばならぬ」ものではなから猛暑日を耐へる生徒に講話は続く
離任するELTの挨拶がとほく聞こえる猛暑のマスク



橘 芳 園 新 湯

『法城を護る人々』出て百年百年変はらぬもの百年変はらず

『法城を護る人々』の僧批判宗門学生の父を鼓舞しぬ

松岡善讓抹香くさき名を厭ひペンネーム讓を本名にしぬ

宗門の差別體質あらはにし松岡讓の小説終る

宗教は文学に邪魔と寺を捨て僧籍捨てし丹羽文雄氏は

水 上 比 呂 美 東 京

すこしづつゆるくなりゆくたらちねをわがゆく道と見をり母の日

すすめられわがゐるさしひをあづけければみだりがはしも座布団の暖

口下手と言ひて乾かぬ舌の根がメタンハイドレートを語る

「生活」にくらしとルビを振つてあるうたがななめに流れるやうに

本ひらくやうにわたしを 青梅にみつみつと水漲れる夜を

風 間 博 夫 千 葉

十二階の南向きなるベランダはベストポジション富士ヶ嶺見るに

宵闇の東京スカイツリーの灯見えて千葉県のはしつこに住む

港区の東京タワーは見えません冬晴れの日の富士見るとも

こらへてる真昼夏の陽をまちわびる夜明け冬の陽を 帽子のひさし

飛行機の後ろ白雲二本生れ直ぐひとすちとなりて伸びゆく

田 中 愛 子 埼 玉

指名打者と代打のちがひ尋ねつつ大谷選手の打席見てをり

朝、昼は白い歯のため寝ねぎはは歯ぐきのために歯をみがくなり

さやさやと雨降りやまぬまひるまをネットで調べ(第七世代)

ひきだしの奥の寄木のひみつ箱だれも開けられず父逝きしのち

コーヒーをすこしバターをたつぷりと加へて仕上ぐ夏やさいかレー

疫病をもたらす弓矢と豎琴を持つアポロンの端整な貌

あぢさはふメトロ路線がねずみらの通路となりて都会を走る

ワクチンの入る左腕薪のごとく重たく肩より垂れる

左腕でたたかひ起きてゐるらしい発熱するか発疹でるか

眠るときどこに置いたらいいだらうコロナワクチン接種せし腕

精魂の尽くるまで啼く蟬なれば今朝の喧噪ほどよき我慢

啼き終へて大地に落つるその時を蟬は成就と思ひゐしかや

転がりて蟻の始末を受けぬま蟬のむくろは時にさらさる

草刈り機ひたすら唸らす男あり梅雨の明けしを寿ぐごとく

笠寺の観音いまだ参らずに古希を越えたりそつと参らむ

疫病のコロナ下の今ふるさとの一人ぐらしの姉が入院す

遠いとほい病室あてにくだものゼリーを送る手紙を送る

担当医と電話で話す十五分 世界はすべて病だれなり

うち沈む術後の姉の枕辺へおはやうお姉ちゃんお休みお姉ちゃん

妹のわれのちからの貧しさと家族を持たぬ姉のまづしさ

原 賀 環 子 東 京

鈴木竹志 愛知

鈴木竹志 愛知

鈴木竹志 愛知

鈴木竹志 愛知

鈴木竹志 愛知

鈴木竹志 愛知

鈴木竹志 愛知

鈴木竹志 愛知

鈴木竹志 愛知

水上 芙季 東京

饒舌なかみなり雲に感電をしながら大雨降らす空です
ぐんぐんと空の背中がわれを押し息ができないどしやぶりの道
大雨で靴はプールのやうだけど依然避けをり暗き水溜まり
「温かく見守って」とある貼り紙の頭上に大きつばめの巢あり
ビルだけが見える十九階の窓けふは入道雲がみました

大野 英子 福岡

生ひ茂る夏木々の葉を打ちながらバスは私を墓苑へ運ぶ
もう六年母に会へない命日を母を捜して墓苑をあるく
いちどだけ来たとき母は車椅子だつたほんやり墓を見てゐた
うすむらさきの日傘をさした母がある墓苑のあぢさゐ通りの日向
あぢさゐとかさなる母のまぶしげな笑顔が初夏の陽に透けてゆく

松尾 祥子 東京

雹が降り風神雷神荒れ狂ふ内閣支持率降下する夏
感染者千人越える東京にぼつたり男爵バツハ来たりぬ
好きないろ青とこたへる二歳児の描く大空に目鼻口あり
考へることが口から漏れ出づる齡となりてひとりごと増ゆ
はつほつと水引の朱の花の咲く夏の終はりに吾を産みし母



島田 暉歌集 令和3年6月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

戦あらずな コスモス叢書第1197篇 角川書店

著者住所 〒246-0015 横浜市瀬谷区本郷一-14-6

高野公彦歌集 令和3年7月刊 三〇〇〇円(税別) 送料三〇〇円

水の自画像 コスモス叢書第1199篇 短歌研究社

著者住所 〒272-0114 千葉県市川市塩焼二-1-21-506

小島ゆかり歌集 令和3年7月刊 三〇〇〇円(税別) 送料三〇〇円

雪麻呂 コスモス叢書第1198篇 短歌研究社

著者住所 〒184-0004 東京都小金井市本町六-1-10-W302

松尾祥子歌集 令和3年7月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

楯円軌道 コスモス叢書第1196篇 角川書店

著者住所 〒168-0065 東京都杉並区浜田山一-12-1-14